

もう二十年あまりも前のことになりました。役人生活時代に経済研究団体の一員にされて、ある時株式取引所を見学したことがあった。総勢六、七十人ほどで、まず実際の取引市場を見学して妙な手つきで売買が進んで、ゲキセキとか称する拍子木が鳴り、一商売済むという状況をつぶさに見終わって、立派な午餐をいただいたのち、大講堂で今は忘れたが、何とかいう有名な理事長の方が、証券売買に関する講演を一時間あまりにわたってやってくれた。

その講演ののち、「何か質問を……」ということになって、折角いろいろとご説明下さったが、どうもまだ株式売買の実際がはっきりとつかめない、というような頼りない質問ともつかない質問が出た。するとその理事長の曰く、一度一日分の財布の金を投じて、株を買い、また売ってご覧下されば立ちどころに判りますといわれて、なるほどと感心したことがあった。

これは今日このごろ、株式熱が市井にゆきわたってきたので、随分実感を味わっている人が多いことでしょうが、ポヤポヤしていれば大損害を受けをのだから、たしかに立ちどころに判明するに違いない。

これは誠に適切な言葉で、ただに株式だけではなく、どの道でも身をもって体験するということは、全く読んだり聞いたりでは掴めないものを教えてくれる。

短歌の世界をすき見して、これを書写芸術に置いた作品、すなわち短冊とか色紙とかあるいは懐紙とかいったものがほしくなり、つい手を出して二、三の著名作家の作品を買って、たちまち偽物にぶつかってこれは大変と驚かされた。ほしいものは誰でもほしいのだから、需要供給のバランスがとれなくなれば、これを補う方便として代用品が製造されるのは、古来いづれの国にもあり、またどの時代にもあったことで、今ごろ驚いている方が少し足りないのだが、体験となると手痛い思いをさせられる。

なるほど、室町時代にもう手鑑と称する対照鑑定のための実物見本帳がたくさん作られている。徳川期にはいるとその印刷ものがた

びたび出版されてもいる。それだけではない、その真贋判定を職業にする古筆家なるものが出現してもいるのである。

ところが今日この手鑑なるものを見ると、ほとんど真より偽の方が多く貼られていて、百枚中に三枚しか真物はないというようなひどいものもある。一帳全部が本物だというようなものにはほとんど国宝や重文などになっていて、街に売られているようなものには、真物を探すのに骨が折れるようなものが多い。また古筆家の極め書なるものも往々あやしいものがある、今日の科学的研究法から見ると、随分噴飯的なものがある。

これでは物を測るものさしが間違っているのだから、いよいよ真物を見つけ出すことはむずかしい。「羹(あつもの)に懲りてなますを吹く」という話があるように、あんまり疑って真物まで見逃してしまうということにさえなってしまう。取引所の理事長氏のように、すぐに判然するというのも、まず世の中のことは随分複雑なものだということから判然してくるようである。

もう二十四、五年にもなるかと思うが、東京の数寄屋橋、今のニュー東京の裏の辺りに大きな古書画の市が定期的になつて、素人の入札もできるのでセッセとここへ通って目ぼしいものを漁っていた。びっくりするような本物も出るし、びっくりするような偽物も出る。少し張り込んで入札した時など、とても不安で不安で、一度入札したものをまた戻って行って、もう一度しみじみ検討してみたことも一再にとどまらない。

ある時、何だか品物は忘れたが相当思い切つて入札したあと、会場を出て朝日新聞社の辺りまで来ると、どうも少し不安のような気がして思わすクルリと引き返して行こうとすると、その入札会場から出て来た曹洞禅宗の某大禅師にばったり出逢った。禅師いきなり「迷うなヨ」と一喝、ハッハッハッハと笑いとばして行ってしまった。これは正に禅堂で頭からピシヤリとやられたと同じで、ハッと眼がさめた思いで、物を見る眼は欲を離れて一度突き放して見る——そして直感の中に響くものでなくては駄目だと判った。手数のかかった悟りで、チト恥ずかしい話である。

(つづく)

〔たかむら〕昭和三十五年一月